

最上川の舟大工と川漁師

最上川河畔の清川の里もここ 1 週間ですっかり寒くなった。先日はみぞれ混じりの雨が降り、南に見える月山も北に見える鳥海山も共に雪化粧され、いよいよ冬の到来を感じさせる。

筆者の所属する NPO 法人里の自然文化研究所が他団体と連絡会を結成して、夏から建造を依頼していた川舟がようやく完成し、先日清川に運ばれてきた。最上川の魅力の一つは自然景観もさることながら、何と云ってもそこに暮らす人々の営みそのものであろう。いわゆる最上川の文化的景観とは歴史的遺物だけではない、今まさに最上川とともに営まれている住民の暮らしの知恵と技術そのものであると言える。その中でも舟と川漁の風景は格別だ。

だがこうした魅力に接し学ぶことは、筆者のような外部者や若者にとって関心を持ってもなかなか難しい。地元川漁師さんや船頭たちの話を聞いても言葉だけでは分からない。そんなわけで「実際に舟を作って、自分たちでも学びながらやってみよう」ということで生まれたのが今回のプロジェクトであった。

この活動の中では川に携わる様々な人との出会いがあった。二人紹介したい。一人は大石田町黒滝にある木村造船所の木村雄一さん。彼は今や最上川流域でただ一人の舟大工である。筆者の懇意にしている製材所から材料となる丸太から選定してもらい、決して規格通りとはいかない曲った板材を見事に工夫して、最上川伝統の川舟（地元では笹舟とも石舟とも呼ばれる）を作っていた。長さ 31 尺、幅 4 尺の木村さんが手がける舟の中でも最も大きいサイズのものだ。最上川ではその集落ごとの用途や流域の自然特性に合わせて舟のサイズや形態も少しずつ異なるという。また材料となる杉板もまっすぐなものほとんどない。それを工夫して舟に仕立て上げるのが技だということなのだろう。こうした技術を木村さんは代々受け継いできた。「注文があれば、まだまだいくらでも作っていくさ」と舟の運び出しの日も元気に話してくれた。

もう一人は庄内町清川の漁協組合長の鈴木春男さんだ。彼は最上川中下流域でもっとも優秀な川漁師の一人だ。春はヤツメウナギからはじまり秋の鮭漁まで年間を通じて川と密着した生活を送っている今回の舟プロジェクトにも厳しい中にも懇切丁寧な指導を頂いた。初心者が操船しやすい舟の形態やサイズ、水流と風の読み方と注意点、魚の生態、川漁における掟の数々、川遊びの数々とその醍醐味、郷土料理の数々など、その一つ一つをあげたらきりが無い。筆者が教えていただいているのは運び込んだ舟を実際に川で運用する際の具体的な操船技術。そしてもう一つ重要なのは地元清川に祀られている舟魂神社への参拝等の年中行事についてだ。舟を操り暮らしてきた清川の川漁師や船頭にとって、その安全航行と豊漁祈願は切実なものだった。集落とその傍らを滔々と流れる最上川を見下ろす高台にその神社はある。筆者もそこに近々舟の安全を祈って拝礼することになる。

最上川をテーマに地域づくりを考えたとき、川と川畔に暮らす人々が健やかで元気であ

る必要があると思う。しかし現状は防災最重視の河川工事によって人々の心が川から離れてしまったこと、環境の変化による川漁への悪影響が指摘されている。自然と織りなしあいながら共生できる新たな川づくりと暮らしづくりを地元の川に携わる人々から学びながら作り上げていく必要があるだろう。今回導入した木村さんの伝統木造船をそうした流れに少しでも役立てていきたいと思う。そうした思いを込めてこの舟に鈴木組合長は「清流丸」と名前を付けてくれた。